

Title	ユベル デモクラフィーと衛生統計に関する講義
Sub Title	
Author	寺尾, 琢磨
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1940
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.34, No.6 (1940. 6) ,p.869(123)- 873(127)
JaLC DOI	10.14991/001.19400601-0123
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19400601-0123">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19400601-0123</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## ユベル「デモグラフィーと衛生統計に関する講義」

寺尾琢磨

現代の統計學が人口統計の解析を中心とせる政治算術に源を發したことは改めて言ふまでもない。人口現象の解明が特に統計的方法に依頼せねばならぬことは、人口なるものが常に社會的集團的數量なることからして明かであり、従つて統計學がこの方面から發達したことも全く不思議はないのである。而もその後には於ける人口調査法の驚異的進歩は益々資料の整備を齎し、凡ゆる統計部門のうち最も顯著なる地位を占めるに至つた。凡そ人口は國家存立の中心的基礎であり、これが研究の重要さは、時と共に増大することはあつても、決して減殺されることはないのである。特に近年に至つて、過剰人口、出生率低下、人口の都市集中、國民體位の低下等の由々しき問題が續出し、朝野の關心を惹きつゝあることは周知の通りである。更に戦争の及ぼす重大な影響を一考するならば、現下の時局は人口現象上の一大轉換期にあるものと認めらるべく、現に未曾有の大戦を経験しつゝある我國も、支那も、歐洲諸國も、戦争終了の曉には著しい程度に、或ひは根本から、異つた人口状態を示すに至るであらう。そしてこれらの變化は、それが最も有爲な壯年男子の喪失といふ由々しい理由に基くものであるから、如何なる點に於ても國家にとつて不利なる性質のものたることは疑へない。即ち起るべき弊害を最小限度に止むべき方策は今から充分

に廻らされて然るべきである。

これが爲に人口統計の整備とその正しい解釋とが不可欠の前提とならねばならぬことは言ふ迄もない。今日の人口調査は、上述の如く、他の調査に比して一段の進歩を遂げてゐるが、素より改善の餘地は極めて多く、更にその解析に至つては益々多くの努力を必要とする。この秋に當つて人口統計に関する一ケの劃期的著作の出現したことは特に報告すべき價值あるものである。

註 我國でも最近次の二著の刊行を見た。何れも注目すべき好著であつて、私は次の機会に紹介の勞を執りたいと考へてゐる。

(1) 塚原仁「人口統計論」千倉書房

(2) 林惠海「農家人口の研究」日光書院

ユベル(Huber, M.)の表記の「デモグラフィ」と衛生統計に関する講義」(Cours de démographie et de statistique sanitaire)は、著者が一九二三年から三三年まで巴里大學統計研究所で行つた講義を纏めたもので、豫定では次の六冊から成ることになつてゐる。

1. Introduction à l'étude des statistiques démographiques et sanitaires. 1938
2. Méthodes d'élaboration des statistiques démographiques (recensement, état civil, migrations). 1938
3. Etat de la population d'après les recensements. 1939
4. Nuptialité, natalité, fécondité. 1939
5. Mortalité, statistiques sanitaires.

#### 6. Tables de mortalité, mouvement naturel d'une population.

そして右の順序を追つて一九三八年以降、巴里ヘルマン書房の著名な叢書 Actualités scientifiques et industrielles に收められて居り、現在までに刊行されたものは最初の四冊である。

著者ユベルが佛蘭西に於ける人口統計學の巨星たることは改めて紹介するまでもないことで、その舊著「戦時の佛蘭西人口」(La population de la France pendant la guerre)及び「佛蘭西人口、その發展と將來」(La population de la France, son évolution et ses perspectives)―これは Bunle 及び Boverat 兩氏との合作である―は、佛蘭西人口の研究に缺くべからざる好著である。今回の新著は既に述べた通り氏の長期に亘る講義そのもの、翻刻であるから、類書に較べて著しい特徴が認められる。それは第一に、主題に入るに先だつて、人口統計の取扱ひ方を説明したことで、第一冊は全部これに充てられてゐる。第二は人口統計に関する殆ど凡ゆる問題を網羅したことで、従來の部分的断片的著作に望めなかつた一ケの體系が與へられてゐることである。

いま各卷の内容を窺ふに、第一冊は右の如く統計的方法一般の説明であつて、統計の獲得即ち統計調査と、統計の利用即ち解析の概要を極めて簡単に述べたものである。度数分布、時系列、相關々係、同種及び異種の統計系列の比較等を取扱つてゐるが、人口統計の解析に屢々利用される各種曲線の説明の如きものは省略されてゐる。五十頁前後のスペースにこの種の知識を盛ることは素々無理な註文であるが、もう少しの工合は出来たのではあるまいか。併したとへこの程度でも、第二冊以下の統計的分析の過程を一應理解するには略々足りるであらう。なほこの第一冊の冒頭に、「デモグラフィ」とは人口、或ひはより、一般には人間集團の研究への統計的方法の適用である」(La démographie est l'application des méthodes statistiques à l'étude des populations ou, plus généralement, des

collectivities humaines)と定義されてゐるが、動もすればこの語が廣義の人口學と混同される事實に照し、右の定義は最も簡明にその本質を傳へたものと認めてよからう。更に最後に調査の整理に用ひられる各種機械の説明が附いてゐる。

第二冊は人口統計の蒐集を論じ、前編「人口靜態」では第一章に佛蘭西に於ける國勢調査の變遷を述べた後、特に一九三二年及び三六年の國勢調査について極めて詳細にその手續を説明し、次で第二章に他の諸國の各種の方法を紹介し併せて調査費の比較にも觸れてゐる。後編の「人口動態」では第一章で出生・死亡・婚姻・離婚の集計法を記し、現に佛蘭西に行はれてゐる調査票の雛形を掲げて詳細にその手續を説明すると共に、他の國々の調査法にも言及してゐる。第二章は移住統計を主題とし、最初に國外移住を、次で國內移住を取扱つてゐるが、特に國外移住の統計の作成に伴ふ周知の困難について相當の頁を費してゐる。即ちかかる統計には直接に求める方法と間接に求める方法があり、前者は(1)出發地に於て、(2)國境に於て、(3)到着地に於て調査する三つの場合があり、後者は(1)二度の國勢調査の比較から、(2)外人及び歸化人の統計から求められる二つの場合があるのである。國外移住統計は特に國際間の比較を可能ならしめる性質のものでなければならず、従つて調査方法の不統一は一日も早く是正さるべき必要があるのであつて、國際統計局や國際勞働局などは屢々これが方法を提案してゐるが、不幸にして今迄のところ何等具體的效果を擧げてゐない。

第三冊に於ては、先づ各國について往時からの人口の増加状態を表示する。次で各國の人口分布をば種々の觀點から眺察し、特に人口の都市集中の傾向を明かにしてゐる。次で人口の主たる特徴即ち體性・年齢・婚姻關係・出生地・國籍・言語・教育程度・宗教・職業・世帯・住居等を擧げて、更にこれらの國際的比較を行つてゐる。最後は主要國家の移住來住の状態で、特に十九世紀以降の合衆國への流出、支那及び日本からの流出、佛蘭西への流入の真相を示すものである。

第四冊に移つて問題は次第に専門化され、婚姻と離婚、出生率と多産率に関する多種なる統計的研究が展開されてゐる。就中戦争、法律、經濟組織、季節、習慣、宗教等が出生率に與へる影響とか、體性及年齢別の婚姻率とか、婚姻繼續期間とかは最も詳細に論ぜられてゐる。特に氏が出生現象を出生率、婦人の多産率及び婚姻の生産率の如き異なる觀點から考察したのは極めて暗示的である。本書のうちに明示された前回大戰の人口に與へた影響、即ち男兒出生の相對的増大、私生子及び複産の増加等は、今次大戰の終了後に於ける交戦諸國の人口様態にも必ず現はれるであらう。これらは戦後の人口政策を問題とするに當つて好個の資料たるものである。

最初に述べた通り、本書の最後の部分に當る二冊は未刊である。(或ひは既に刊行されたのかも知れぬが、少くとも私の手許へは届いてゐない。今年になつてから歐洲からの發送は餘程困難らしく、豫約書の殆ど全部が未着である)。故に本書の價值について何等かの斷定を下すことは尙早であるが、併し上記の既刊分から推定すれば、恐らくは人口統計に関する最良の書、乃至は少くともその一つと認めて謬りはなからう。

なほ本書の收められてゐる上記の叢書は、その七一〇號から七一七號までの八卷を、一九三七年巴里に開かれた國際人口會議の報告に充てゝゐる。ユベルの上記の書と共に併せ讀まれるならば、人口に関する最も up-to-date の知識を得ることが出來よう。